

## ブルトマンについて

03C004 村 上 穀

### 1. 緒論

私は日本キリスト教団体に所属する東中通教会の信徒です。25才の時にこの教会で洗礼を受け現在に至っております。最近感ずる事は相対的にキリスト教が退潮傾向にあるということです。私の教会は30年前には平均年齢は45才位でしたが現在は62才位です。老骨に鞭打ちながら頑張っている古い信徒は第二次大戦が終わった、いわゆる終戦の時代、急激に社会の価値観と構造が変化した時期にキリスト者になった人々が主体です。他の教会も大同小異だと思われます。このように考えるとキリスト教に限らず宗教の隆盛は社会構造の急激な変化と偉大な指導者の出現が起爆剤となっているようです。それはマルティン・ルターによる宗教改革や、それに伴うカトリックの反省から生まれたイエズス会のフランシスコ・ザビエルによる最初の日本宣教の成果などにも示されていると思います。隣国の韓国教会の隆盛も、祖国を分断され、共産主義国家である北朝鮮の脅威からくる国民的緊張感が、そうならしめている一つの要因だと思われます。

私の所属する教会は創立以来128年の歴史を有する伝統的な教会ですが、マンネリを打破するために5年位前から信仰の様式を変更いたしました。それは信仰の中心となるべき聖書の解釈を従来の演繹的方法から帰納的方法に変えたのです。演繹的な聖書の理解とは牧師による指導、或いは注解書を中心としたもので上から下への受け身の理解方法と言えましょう。帰納的な聖書の理解とは、聖書を聖霊の導きによって各人が直接理解しようとするもので、下から上へ向かっての理解方法とも言えます。その結果を知識として理解するに止めず、自己の信仰生活に適応し、伝道に適用しようというもので近年韓国教会で採用され成果をあげているものです。日本の教会の牧師も多数の方が韓国に行って学ばれ、自分の教会に適応しようとされていますが、必ずしも願ったように進展していないようです。特に老年層が多い伝統的教会ほど抵抗があるようです。私の所属している教会にもそのような傾向があります。そんな体験を通して私はつくづく聖書解釈は演繹的でも帰納的でも、またその中間でもない、それは自分で確信のもてる、あるものでなければならないと思うようになりました。

昨年、敬和学園大学主催の市民講座に於いてイスラム文化についてお聞きする機会がありました。そのなかでイスラム教には牧師に相当する人が存在せず、一日三度の礼拝を守る他は特に厳しい戒律もないのだそうです。つまり一人一人がイスラム教についての自己の神学を持ち、それによって積極的に伝道を展開して行く、それがイスラム教が世界的に伸びている大きな要因なのだそうです。その点、日本のキリスト教は対照的で反省すべき点があるようです。牧師依存型の本質は反省を迫られているのではなかろうか。以前より言われている万人祭司、最近言われている小集団活動、弟子訓練などはその対応策のひとつと言えるでしょう。私は今まで神学などというものは、牧師になろうとする方が学ぶもので、私たち信徒には関係のないもの、いやむしろ自分の信仰がそれによって理屈っぽくなり、本当の信仰から遠去かる傾向があるのではないかと感じて

いました。しかし、敬和学園大学において社会人等が学べるよう配慮して下さった科目等履修生としてイブニングコースで山田耕太先生より新約聖書神学を学ぶなかで信徒こそ神学を学ぶ必要があると思うようになりました。勿論そこには聖書に対する関心が本質的・靈的なものから方法論的なものへとそれてしまう傾向については注意すべきでしょうが、それでも今日においては責任を持った、しかも学問的批判にも耐えうる仕方で聖書を取り組む方法こそが分派主義的な聖書の誤用から生じる逸脱から身を守る大切な方法なのではないでしょうか。山田先生の講義では毎週10名位の学生が学ぶには勿体ないと感じさせられています。受講する学生がたとえ少なくとも山田先生はそれに関係なく真剣に授業を行って下さり、授業が一方的にならぬよう授業の終わりには必ず質問の時間を設定して下さっております。受講するメンバーは敬和生の皆さん、牧師検定試験Cコースを目指しておられる方、それに私のように普通の信徒といった種類の人が程よく混じり合っているようです。私は社会人として、先生に質問する場合、なるべくその内容が学生の方々と共有できる問題に絞りたいものだと願っています。

山田先生より教えて頂いた内容との関係を含めて私が興味を持たせられたのが敬和学園大学発行の『チャペルニュース』で連載されている山田先生の研究ノート「イエスとは誰か」であります。現在は1～4号まで発行されていますが大変興味深いものです。そのなかで特に注目させられたのがブルトマンという新約聖書学者についてです。このブルトマンとその周辺の人々についてまとめてみたいと思います。

## 2. ブルトマンについて(その一)

山田先生が研究ノート「イエスとは誰か」の中で述べておられるブルトマンについての内容の要約は下記のようなものです。

- (1) ブルトマンは今世紀を代表するドイツの新約聖書学者である。彼は史的イエスの探求是不可能であると提唱した。
- (2) 史的イエスを最初に探求したのはドイツの啓蒙主義者ライマールス(『イエス伝』)で、これを継承、発展させたのはシュトラウス(『イエス伝』)であった。
- (3) 20世紀のイエス研究はシュヴァイツァーの『イエス伝研究史』とヴレーデの『メシアの秘密』の両著によって始められ時代を画するものとなった。しかし、何と言っても20世紀前半のイエス研究を決定づけたのはブルトマンである。彼はゲンケルが旧約学ではじめた「様式史」を福音書研究に取り入れた。この「様式史」は20世紀前半から半ばまでの新約学の方法論を決定づけた。ブルトマンはその著書『共観福音書伝承史』のなかでイエスに関する客観的な歴史については問うことは出来ないが、自分の存在や経験と係わる内面的な実存史については問うことが出来ると言っている。これは絶対的な信仰を相対的な歴史に根拠づけることは出来ないというレッシングの立場を実存主義の哲学で裏打ちして表明しているのであるが、それはまた『存在と時間』によるハイデッガーの実存主義哲学の影響や、バルトの『ローマ書』などに代表される弁証法神学の影響の下で書いた『イエス』の中で更に明確になる。このような「史的イエスの探求是不可能であり、不適切である」という彼の主張は第二次世界大戦以前のドイツのみならず世界の新約の潮流の中で支配的になった。ブルトマン学派において史的イエスの新しい探求がなされたにも拘わらず1960年代以降にそれが展開して行かなかったのは彼らもブルトマンと同じく、原始キリスト教の宣教の使信である「ケリュグマ」神学という実存主義哲学に裏打ちされた哲学から解放されていなかった

からである。

山田先生は「イエスとは誰か(一)」の中で次のように述べておられます。「本稿では現存する資料を駆使し『史的イエス』を捉えることが可能であるという立場をとり、その輪郭を探り求めることを目的とする。もしそれが可能であるならば次に『史的イエス』がどのように『信仰のキリスト』に変貌していったかという第二の謎に迫ることができよう。」私たちが今年学んだ内容もこの線に沿ったものであったと思う。そんな意味からもブルトマンの人物とその業績に迫ることは意味のあることと思う。

### 3. ブルトマンについて(その二)

ブルトマンというと不信頼の権化であるかのように非難する人もいるが、そのような人々は「非神話化」という言葉以外にブルトマンについては殆んど知らずに言っているのではなかろうか。20世紀のプロテスタント・キリスト教は若しブルトマンが出現しなかったとしたら随分貧弱なものになっていたに相違ない。そんな意味からもブルトマンのキリスト教に対する功罪を明確にすることは意味のあることと思う。1941年に第二次世界大戦のドイツにあってブルトマンは新約聖書の「非神話化」を提唱した。この発言はそれ以降のキリスト教界にはかり知ることの出来ない程の衝撃を与えた。ここに新しく、主体的、実存的な聖書の読み方が示されたとも言えよう。彼の聖書の実存論的解釈が現代神学の根本になっておりブルトマンの主張は科学技術の発達した現代世界に生きる我々に、知性を犠牲にすることなく納得出来るやり方で聖書と取り組みキリスト教を信じ続ける力を与えてくれる。またバルトと共に行ったナチズムとの勇気ある対決は、我々にブルトマンとバルトの築いた神学が、困難な極限状況においても悪魔の力に対抗できる神学として認識され高く評価されてきた所以もあると思う。参考までに私の尊敬する作家の遠藤周作はその著書『キリストの誕生』の中でブルトマンについて次のような興味ある見解を示しています。

「日本人にもよく知られており、現代聖書学に忘れがたい足跡を残したブルトマンはイエスの教えと、その後の弟子たちの結成した原始キリスト教団の信仰を比べあわせた後、次のような悲観的な結論に達した。『イエス自身はキリスト教徒ではない』と。私は長年にわたるこれら聖書学者の綿密なテキスト分析や考証に深い敬意を払う。そしてその成果を保守的な神学者のように無視する気持ちなど毛頭ない。にもかかわらず私はブルトマンのように『イエスの思想は新約思想とは同じではない』とは言い切れぬ。何故なら自分は小説家、芸術家としての体験から、素材(イエス)と作品(原始キリスト教団の信仰)との深いつながりを理屈をこえて感ぜざをえないからだ。」

### 4. ブルトマンの業績

#### (1) ブルトマンの神学探求方法

哲学の探求方法は以下の方法が考えられるが、神学においても同様と考える事が可能である。演繹法、帰納法、批判的方法、弁証法、直観的方法、現象論的方法。このうちでブルトマンがバルト等と共に採用した方法が弁証法的神学である。弁証法的神学とは「両立しないで対立する『矛盾』を通して真理がその統一として生成、発展してゆく筋道をとらえようとする思索方法」でケルケゴールとマルクスによって発展した、哲学に神学の基礎を求める、現代における有力な学問方法。この弁証法的神学によって従来の正統神学と自由神学(19世紀の科学とダ

ーウィンの進化論に基づいたもので聖書を批判的に分析し、聖書は靈感によるものではなく一般的の古典と同様であると判断した)の欠点を克服することが出来たと言える。

### (2) プルトマンの思想判断

プルトマンの思想を適切に判断するには、その「非神話化論」だけでなく一連の彼の著書に注目する必要がある。彼の著作を年齢順に記載してみると下記のようになる。

30才台：「様式史」の確立。

40才台：著書『イエス』によって世界中に波紋を投げかける。

50才台(前半)：著書『ヨハネ福音書』の執筆に集中。ここにおいては一貫して実在論的聖書解釈を貫いており、そこにはキエルケゴールの影響が強く見られる。

50才台(後半)：上記『ヨハネ福音書』の成果として「聖書の非神話化」を提唱した。

ここにおいて見られるようにプルトマンは「聖書の非神話化」のみを単発的に提唱したのではなく、その前に「様式史方法の確立」という聖書の有力な史的研究法を確立している点に目を止めなければならない。また「聖書の非神話化」を提唱した背景として従来の正統神学或いは自由神学に対応するものとしての実在論的聖書解釈を強調するための要因も強かったのではあるまい。

### (3) プルトマンの共働者

プルトマンはその神学の幅を広げてくれた幾多の友人に恵まれていたが、そのなかでもハイデッガーとカール・バルトは特筆されるべき共働者であった。ハイデッガーの実存主義の姿勢は現実を描き出すことではなく、現実を成立させている人間存在の基本的な構造を学問的分析によって抽出することにあった。彼はプラトンからニーチェに至る形而上学を解体し、存在と開示の出来事を理解する発端となった『存在と時間』を発行したが、プルトマンはその実在論的聖書解釈を確立する上でこれから大きな影響を受けている。またカール・バルトはプルトマンと共に当初は弁証法神学において一致して雑誌『時の間』を刊行したりして共に歩み、後には古典的正統神学と近代的自由神学を解体し再構成すると共に福音の真理を堅持しながら、20世紀の学問的成果を自己の中に取り入れ、啓示の神学として20世紀最大の神学者としての地位を不動のものとした。そして不朽の名著『教会教義学』を著わした。この著書は神学の正しい道を示すのに偉大な貢献をした。巨大で難解なこの著書は現在人気を失なったかに見えるが、やがて困難なものが再評価され、努力と忍耐が貴ばれる時代が来るとき、バルトの偉大さは再評価されるであろう。このようなバルトの業績もプルトマンとの親交なしにはあり得なかったであろう。

バルトとプルトマンを比較した場合、バルトは「神の視座」から見た神学、プルトマンはどちらかと言えば「人間の視座」から見た神学と言えるかもしれない。プルトマンの「聖書の非神話化論」は世界の史的イエスの探求に支障を来たとも言われているが、「様式史」の確立を乗り越えて研究が進むならば必ずしもそれは当たらないのではなかろうか。世に「バルト主義」という言葉はあるが「プルトマン主義」という言葉は見当たらない。代わりに「プルトマン学派」という言葉がある。これはプルトマンが自分の業績にこだわらず、むしろ弟子たちが彼を乗り越えて歩むことを願っていたからに外ならない。神学発展の一つの過程としてプルトマンとバルトは神様が配置して下さった現代神学と信仰の偉大な導き手であったと言えよう。この偉大な先達の足跡を覚えつつ、山田教授をはじめとする史的イエスの研究が今後大きな成果を挙げられることを期待したい。

(レポート指導教員 山田耕太)